

歴史の旋回期に直面するアジア

中嶋 嶺 雄

(東京外国語大学教授・国際関係論)

湾岸戦争後の世界の焦点は、再びアジアに移行するのではなからうか。ここ一、二年の世界の歴史は、その深部の潮流が決定的に変換したにもかかわらず、その残務整理がアジアにはまだかなり残っているからである。

私は世界のそのような歴史的变化を「一九八九―一九〇年革命」と呼ぶことにしているが、脱社会主義、脱冷戦という二つの大きな流れを基軸にして、世界はまさに根本的に変わった。その象徴的な表現が東西ドイツ統一であったといってよい。東西ドイツの統一は、東欧の脱社会主義化、そしてそれを是認せざるを得なくなったゴルバチョフ・ソ連の立場があったからこそ実現したと言ってよい。一方、そうした東欧の民主化から、最近のヨーロッパにおける全欧安全保障会議による新しい不戦体制の確立は、米ソの歴史的和解つまり脱冷戦への転換があったからこそ実現したのである。

こうしてヨーロッパを舞台とした脱社会主義と脱冷戦の動きが、非ヨーロッパ地域、とくにアジアの国際環境の変化をもたらすものかどうかが、これからの時代の大きな焦点になるであろう。

なぜならば、東欧社会主義の崩壊、ソ連体制解体への動きにもかかわらず、アジアには中国、北朝鮮などの社会主義諸国が残っており、また、ヨーロッパのような安全保障シテムが確立する共通基盤に欠けているからである。従って、脱社会主義化と脱冷戦がこのままアジアの平和と安全には直結しないという問題が指摘されねばならない。

もっとも八九年四月以来の中国の民主化運動は、悲劇的な天安門事件を招いたのだが、逆に考えると、中国のようにはなりたくないという合意がルーマニア以外の東欧諸国には存在したのであり、そのことが東欧諸国の急激な脱社会主義化をもたらしたとも言えなくはない。この点では中国の悲劇が東欧を救ったともいえるのだ。

その中国の民主化運動から始まった社会主義解体への動きは、ユーラシア大陸を一巡して、中国の隣のモンゴルにまで及んできている。それだけに中国も、今後数年間のうちには、脱社会主義化の圧力と、日本をはじめ韓国、台湾、香港、シンガポールなど八儒教化圏Vの活力ある経済によって、大陸沿岸から徐々に社会主義体制が浸食されてゆかざるを得まい。このことが世代交代、つまり革命第一世代指導者の退場という問題ともからんで中国に大きな変化をもたらすであろう。場合によると香港が中国に返還される一九九七年七月一日以前に、中国の共産党政権の方が崩壊するかもしれない。

中国の動搖は、北朝鮮にも大きなインパクトを与えずにはおくまい。今日、金日成独裁体制下で政治的には超安定状態にあるかに見える北朝鮮は、国際的孤立化のなかでいよいよ日本やアメリカなど西側諸国との交流をよぎなくされておき、こうして西側の情報ネットワークのなかに徐々に組み込まれてゆかざるを得ない。そのことがチュチェ(主体)思想に基づく北朝鮮の一種独特の社会主義体制——それは社会主義というよりは「儒教的権威主義体制」だと言えよう——を掘りくずしてゆくことになるのではないか。

もっとも、ベルリンの壁の崩壊が、三十八度線の消失につながるかどうかは、多くの人がもっとも関心を寄せている課題であるけれど、私が見る限り、特にこの問題では、南北朝鮮が血みどろの内戦（朝鮮戦争）を体験した事実に加えて南北の経済的格差、社会的な違いが東西ドイツ以上に大きいこと、そしてとくに南北朝鮮が金日成、金正日への権力継承の極めて微妙な段階にさしかかっていることを無視するわけにはゆかない。これらのことからすると、どうも九〇年代の早い時期に三十八度線が消えることは不可能なように思われるが、ここにもアジアにおけるひとつの情勢の流動化要因が存在していることは、いうまでもない。

私は昨年五月、日本国際政治学会東アジア分科会訪朝団長として初めて平壤を訪れたが、北朝鮮は、チュチュ思想、金日成崇拜を中心とする一種の新興宗教国家だという感じを強く受けた。この北朝鮮のハードな政治システムは、北朝鮮の「ルーマニア化」を回避しようとするかぎり、やがて「台湾化」を志向することによってしか、当面の打開の方法がないようにも感じられた。

つまり、台湾もかつては大変厳しい蒋介石独裁体制下にあったのであって、それを自らの実子である長男の蔣経国に譲り渡すことによって、一種の儒教的家父長体制下の権威主義体系によるテイク・オフをはかってゆき、やがて今日の李登輝民主体制に移行していったのである。このことは、いわば儒教的な父子権力継承の家父長的体制の中で考えると、意外に抵抗がないわけで、ちょうど同じことをいまの北朝鮮は、金日成から金正日への親子の権力継承として考えているのではないか。

そして、北朝鮮自身、対立する韓国がソ連と国交を樹立し、中国と接近するということになる、逆に台朝関係という、従来予想もしないような新しい国際関係がアジアに登場することも考えられよう。いまから十年前に、ソ韓関係とか、中韓関係というアジアの国際関係を、多くの人は予測できなかったのであって、今日、アジアの事態は、この点でも大きく動いているのだといわざるを得ない。